

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

ドイツ現代女流作家ルイーゼ・リンザー素描：
小説設定の舞台構成を中心として

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 1986-01-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/687

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ドイツ現代女流作家ルイーゼ・リンザー素描

—小説設定の舞台構成を中心として—

南 道子

ドイツにおける現代女流作家を代表するものは実に多くの人々がいるが、その中で、第二次世界大戦の混乱したドイツ民族に、その立ち直りのための精神的支柱の役割を果たした作家としては、

リカルダ・フーフ

(Ricarda Huch 1864—1948)

エリザベート・ランゲッサー

(Elisabeth Langgässer 1899—1950)

ゲルトルート・フォン・ル・フォール

(Gertrud von le Fort 1876—1971)

などを最高峰と見ることは、ドイツ文学史家も、等しく認めるところであろうが、私が彼女らから得た印象によれば、ランゲッサーもル・フォールも共に、グレンツマン (Wilhelm Grenzmann) の説くところのいわゆる『キリスト教的世界』観を背景とする人々であり、(注1)ランゲッサーの『消えない印』—Das unauslöschliche Siegel— (1946) にしても、『マルク地方のアルゴ号の航海』—Märkische Argonautenfahrt— (1950) にしても、作品の根底を流れるものはキリスト教的信仰であって、人間の自我の強さによる『現代の問題』の解決よりも、現代苦を神と悪魔の闘いとして見て、究極においては、神の勝利—信仰の強さ—が人間の魂を救うものであると説くのではないかと解される。これは多少ニュアンスの差こそあれ、ル・フォールの場合も同様であるように思われる。

こうした作家に比べればリンザーは、一言にして云えば、ずっと私たちの身近に感じられる作家である。私になぜ、リンザーを身近に感じるかを率直に言えば、彼女は同じく熱烈なキリスト教信者であり、作品の根底にはキリスト教的要素があっても、それが読者に前記の作家ほどに強く意識されないためである。すなわち、現代の人間苦の問題が、キリスト教という前提条件を意識して説かれた作品においてよりも、私にとっては、なんらの前提条件を設けない、誰もが容易にそれと取り組んでゆかれるような作品の方により強く魅きつけられもし、また問題をキリスト教的救済と局限しないで、他の宗教を信じる者にも、なんらかの解決への燭光を見出せるような作品により多くの魅力を感じるからである。さらに、小説中の人物の心の動

き、きめのこまかさ、肌ざわりの柔軟さは、リンザー独特の魅力的な文体であろう。また彼女の書く文章は、まったく簡潔であり、しかもそこに清新な香りがある。

彼女から代表作の一つ『ガラスの波紋』—Die gläsernen Ringe— (1940) を贈られたヘルマン・ヘッセ (Hermann Hesse 1877—1962) は『あなたの素晴らしいお作を感謝しつつ拝読しました。そして作品の持つ魅力によって私はすがすがしい心もちになり、お作が好きになりました。純粹にして気品あるドイツ語に接したのも大きな喜びでしたし、また内容についても精神的なものへの努力の跡に喜びを感じました』と絶賛の手紙を送っている。(注2)

私になぜリンザーに傾倒するかに関連してさらに一言、私のドイツ文学研究の態度を述べれば、日本人である私が、言語も人種も国情も異なるドイツ—あるいはドイツ語を母体とする国—を地盤とするドイツ文学に魅せられそれに携わっているのは、文化の相違を超越して『人間』同志としての共通の問題をドイツ文学の中に発見し得るからである。そして今の私にとっては、それは、幾多の問題をただ『発見する』だけでなく、そしてまたその発見を他の人々のために解説するのでもなく、その発見を自らの成長の糧にしたいからである。

他のすべての学問研究がそうであるように、文学の研究、否、文学そのものが持つ使命は人間完成への手段である、と私は考えている。おそらくこれは私の独断であるかもしれない。しかし、少なくとも今の私は、文学および文学研究は研究のための研究であってはならず—それはいたずらに文学を弄ぶものである—、また人間完成に何の役にも立たぬものは、文章の連続であっても決して文学とは言えないと思っている。

我々が文学作品を読む場合、その目的は人によって異なるが、私の場合、それは人生の中で遭遇する数々の苦悩に耐え、それを克服してゆく力の一端を貸してくれるものであり、それはまた私の魂の友となってくれるものなのである。したがって、作品自体がいかに哲学的、神学的、文学的にすぐれたものであろうとも、そこに人間的に深い繋がりを感じず、また私の魂の友となり得ないものには傾倒しがたいのである。

こうした観点に立ってリンザーの作品を読んでもみるとそこには、先に述べたように人間苦の問題解決への指針が身近に感じられるのである。

私は今回は、彼女が作家として認められるようになった処女作『ガラスの波紋』から『道徳の冒険』—Abenteuer der Tugend (1975) —までの、つまり前期の作品を基本にして問題点を検討し、それ以後の後期の作品に関しては次回に述べることにする。

まず、彼女の主要作品

『高地』—Hochebene (1948) —

『生の半ば』—Mitte des Lebens (1950) —

『ダニエラ』—Daniela (1953) —

の三長編小説において特に目立つ小説作法上の一つの問題に焦点をしばっていききたい。なぜならばその問題は、形式的には一つの技巧の問題ではあるが、それは実にリンザーを理解する一つの大きな鍵であると信じるからである。

本 論

彼女の作品を知るに先立って私はまず、彼女の私生活に触れてみることにする。それは多くの文学者がそうであるように彼女の場合もまた、その作品中に多くの自伝的要素が含まれているからである。

第一節 ルイーゼ・リンザーの生い立ち

ルイーゼ・リンザーは1911年4月30日、オーバーバイエルン Oberbayern のピッツリング Pitzling に小学校教師の娘として生まれた。ミュンヘン大学で心理学および教育学を学び、1939年まで3年間教師を勤めた。1940年彼女は処女作を出版したが、ただちにナチ国家によってその後の執筆を禁止された。のちに彼女は『獄中日記』—Gefängnistagebuch (1946)—の中でその事情を詳しく報告している。

1944年10月から終戦まではシュターデルハイム Stadelheim の強制収容所に身柄を拘束されていた。ヒトラーに反対したかどで実は、終戦直前に死刑の宣告を受けたのだが、ナチスドイツ崩壊のため処刑を免れて生きのびたという数奇の運命の持ち主である。

1981年3月、長年にわたる出版社からの要望にもかかわらずその執筆を断ってきた彼女が、『狼を抱擁する』—Den Wolf umarmen—と題して自伝を出版した。その年の6月、尹伊桑 (1967年 KCIA によって西ドイツから拉致され死刑の宣告を受けた韓国出身の作曲家) との対話形式による彼の自叙伝『傷ついた龍』の日本語翻訳出版記念で来日した彼女は朝日新聞社での講演で、その自伝『狼を抱擁する』について次のように述べている。(注3)

『私は自伝を書くことを欲しなかったのは、自分自身について書くことは、しかもそれを嘘を含まずに、誇張あるいは過少表現もせず書くということは、非常に難しいことだからです。しかし70才というこの年になってあえてそれを決意したのは、ドイツの若者がそれを強く望んだからです。ドイツ、スイス、イタリアなどの若者が、

「あなたは大変な体験を持ちながら、どうしてそんなに若く、希望にみちて絶えず知識欲をもって自分を変えていくことができるのですか」

と尋ねるのでそれに答える気になったのです。

私はできるだけ真実を書こうと、またできるだけ記録に則してそれを書こうと、手紙や日記や私の全生活を記録したメモなどをすべて読み返し、その真偽を確かめました。さらにまた、昔自分が書いた本を読み返しました。それらの本は自伝ではありませんが、どの作品中にもわずかながら自伝の核になるものが含まれていたからです。』

また1944年の秋、彼女が村の憲兵に連行されるに至ったいきさつを次のように説明している。

『1944年の夏、戦争の最後の年でした。ある日のこと、一人の婦人が私の家のドアのまえに立ちました。その婦人はやつれておどおどしていました。昔の同級生のディズルだったのです。まったく久しぶりの再会でした。

彼女の夫はナチス党员，それも前線のゲシュタポ（注5）の一員でした。兵士たちをスパイして，ヒットラー総統に反対する者，戦意を喪失した者，厭戦気分の者を密告し，消してしまう任務を負っていたということでした。

「だから？それで？」

と私は尋ねました。

「私になにかしてあげられることがあるかしら？」

「別になにも。私は心中するの。三人の子供と一緒に」

「どうして？」

「戦争に負ければロシア人がやってきて，ナチスを全部殺すでしょう。ゲシュタポの士官を特に残虐なやり方で」

「ばかな人ね」

と私は言った。

「今すぐあなたのご主人に手紙を書き，こっそり逃げ出し，変装して故郷へ帰って隠れているようにお伝えなさい。あなたは子供たちと何とか切り抜けて飢え死にしないようにしなさい。そうしたら私も助けてあげるわ。戦争はもう長くは続かないのだから。元気を出して！」

そして1944年10月12日の朝がやってきました。朝食まえの早朝のことでした。村の憲兵が二人私の家へやってきました。

「たぶん証言のことだから，すぐ帰宅が許されるだろうから着替えの必要はない」と憲兵は言いましたが，私はいやな気持ちになりました。最悪の事態（死刑判決）までは考えていませんでした。

私は尋問を受けました。

「あなたは，休暇帰郷中のドイツ国防軍の一員に，反戦的なことを語りかけ，脱走をすすめた」

（その通り）

「あなたは国外の敵と文通した」

（その通り，もしもヘルマン・ヘッセを国家の敵とみるならば）

「あなたは捕虜との交際が禁じられているにもかかわらず，ポーランドの婦人捕虜たちと付き合い靴と石けんを与えた」

（その通り）

「あなたはザルツブルクで道路工事をしていたロシア人捕虜たちにいつもタバコをやっていた」

(その通り)

「あなたは冬期救済事業の寄付をこのきたない戦争を長引かせたくないという理由で拒否した」

(その通り)

「あなたは敵国の放送局が流した反戦的なニュースをひろめてドイツ国民の戦意を喪失させた」

(その通り)

「あなたは国民のために労力を提供することを拒み棧橋のそばの工場で働くことを拒否した」

(その通り)

この工場は地下の軍需工場で私は事実そこで働くことを拒否したのです。

「あなたは……」

「あなたは……」

こうして起訴状は4ページにもわたっていました。私はすべて否認しました。すると反撃が加えられ、

「あなたはある将校の妻に、総統を侮辱するようなことを語り、戦争は負けると言い、彼女の夫に脱走をそそのかした」

と問い詰められました。これでやっとすべてがわかりました。あのばかな女が密告したのです。私は否認しました。

最後に憲兵の一人が立ち電話をかけに行きました。彼は戻ってきて言いました。

「あなたは国防力破壊と国家への反逆のかどで、総統の名において逮捕された」

私はそのとき膝が震えました。やはりそうだった。私は逮捕されたのです。

憲兵は私を、尋問を受けていた村の宿屋から家に連れて行き、しばらく独りにしてくれました。私は村のマリーおばさんと呼びにゆかせました。彼女は、私にとって不利な手紙や書き物のたぐいを焼却するのを手伝ってくれました。そして、もしも私が生きて帰ることができないようなときには、子供たちのめんどうをみることを約束してくれました。

すべてが終わってから私は小さなクリストフを膝に抱き上げました。シュテファンはそのとき保育園にいました。彼のために絵を画いてやりながら心の中で思いました。「坊やおまえはおそらくママにはもう会えないでしょう」と。

行かねばならぬときがきました。私は泣きませんでした。振り返ることもしませんでした。』

このようにして彼女はとらわれの身となり、独房でのあの恐ろしい孤独の生活が始まった。終戦後、彼女が獄中での生活を書いた『獄中日記』は、戦後はじめての収容所生活を綴ったものとして出版された。

その後リンザーは矢継ぎ早に多くの小説、評論、子供向けの読物などを出版し、先にも述べ

たように彼女独特の簡潔な文体で、作家としての位置を確固たるものとした。彼女の主な作品は今日まで、数ヶ国語に翻訳されている。近年は日常生活の諸問題をテーマにした人生相談的な随筆(注6)も書いている。

現在はローマ郊外に住み、作家活動を続けている。ベルリン芸術アカデミーの会員でもある。

第二節 ルイーゼ・リンザーの小説設定の実存主義的傾向

リンザーの小説を考察するとき、まず最も重要なことは彼女の小説設定の基礎となる舞台の構成が実存主義的であるということである。つまり限界状況の設定ということである。徹頭徹尾登場人物を特殊な世界に追い込んでいって、その中で人間が苦悩する。そしてその苦悩を乗り越えてゆこうとする人間の努力が、二者選一を迫られる状況下に置かれる。逆にいえば、それは選択に悩む人間の苦しみを描写するのにもっとも適した状況設定がなされるのである。彼女の作品『高地』ではこれが外面的な極限状態の姿で描かれているが、十年後に出版された『生の半ば』および『ダニエラ』になると、極限状態が内面的なものへと移っていく。これらの点を彼女の作品を参考にしながら考察してみよう。

第三節 高地における外面的限界状況

『高地』を述べるにあたって私はここに、現代フランスの文豪、アルベルト・カミュ(Albert Camus 1913—1960)の代表作『ペスト』を対照においてみたい。なぜならば、『ペスト』における小説の舞台は、『高地』のそれと大変良く似ているからである。

『ペスト』はオランという架空の極暑の町での出来事で、まず一匹のねずみの死から話が始まる。その一匹のねずみの死は、やがてペストという恐ろしい伝染病の流行という事件をひき起こし、ついにはこの地方が他の町から隔離封鎖されてしまう。そこでかれらの住んでいる世界が、『かれらの世界』としての性質を示し始めるのである。それは次の言葉の中にもあるように、人間が逃げようとしてもそこから逃れることのできない特殊な状態におかれてしまうのである。

『……死亡者の数が再び三十台に達した日、ベルナール・リュウは、「すっかり怯えちまったんだね」と言いながら、知事が差し出した公電を眺めている。電文にはこう記されていた—「ペストチクタルコトヲセンゲンシシヲヘイサセヨ」。この瞬間から、ペストは封鎖されたその地区の人たちすべての者の事件となってしまったのである。

それまでのところは、これらの突然の出来事によって引き起こされた驚きや不安にもかかわらず、とにかく市民各自は普段の場所でまがりなりにも、めいめい各々の業務を続けていた。そしておそらくこの状態が続くはずであったが、しかしひとたび市の門が閉鎖さ

れてしまうとなると、自分たち全員が、かくいう筆者自身までも同じ袋のねずみであり、その中でなんとかやってゆかねばならぬことに一同、気がつかされるのである。

当時の人々のペストに対する恐怖は、現代の原爆戦争に対する恐怖以上のものであったと思われる。つまり人間の意志やお互いの話し合いなどでは解決できない種類のものだからだ。そしてそれはまた何時襲ってくるかまったく計り知れないものなのだからだ。

……市の閉鎖から生じた事件の顕著な結果の一つは、事実そんなつもりはまったくなかった人々が突如として別離の状態におかれたことであった。母親と子供たち、夫婦や恋人同志など、数日まえにほんの一時的に別れるつもりでいた人々が市の駅のホームで二言三言注意を交わしながら抱き合っ、数日あるいは数週間後に再会できるものと確信して、人間的な愚かしい信頼感にひたりきって、この別離のため日常の仕事から心をそらすことさえもほとんどしなかった人々が、一挙にして救うすべもなく引き離されて、相見ることすらもまた文通することもできなくなったのである。閉鎖は県知事布告の発表される数時間まえにおこなわれ、そして当然のことながら、個々の特例を考慮することは不可能であったのである。

……実際のところ、自分たちがまったく妥協の余地のない状態の中にあり、「折れ合う」とか「特典」とか「例外」とかという言葉はまったく意味がなくなっていることを納得するまでには、多くの日数を要したのである。手紙を書くというささやかな満足さえもわれわれには与えられていなかった。事実、一方でこの町はもう通常の交通手段では国内の他の部分と連絡できなくなっていたが、さらにまた新たな布告によって、手紙が病毒の媒介となることを防ぐためにいっさいの信書の交換をも禁止されてしまったのである。

……自らの現在に焦燥し、過去に恨みを抱き、しかも未来を奪い去られた、そういうわれわれの姿は、正義あるいは憎しみによって鉄格子の中に暮らさせられている人々によく似ていた……』(注7)

以上、いくつかの引用文からみても、カミュが人物をどのような状態においているかが明らかである。ここで『高地』の中からもいくつかの文章を引用して、それを前者と比較してみよう。この二つの小説の舞台設定がいかに類似しているかがわかる。

『ペスト』では一匹のねずみの死から話が始まるが、『高地』では主人公ユリアーネの父親の死から物語は展開される。

ユリアーネは以前には普通の女の子として裕福に暮らしていたが、父親の死に出会うとそこに残されていたものといえば、借金と孤独だけであった。彼女の母親は六年まえ、すでに死んでしまっている。

母親の死後、彼女はジュネーブにある学校の寄宿舎に入れられていた。以来彼女は父とは一度も会っていなかった。

二月はじめのこと、ユリアーネは父親の危篤の電報を受けて、見知らぬ町へやってくる。彼女が父親が泊まっていたホテルに着いたとき、彼はすでに死んでしまっていた。

『ユリアーネはひどくみすばらしい黒い棺のかたわらにただ一人ひざまづいて、ざらざらの安物の棺の上にそっと手をおいた。棺の置かれているホテルの部屋も貧しかった。

「お父さんはなぜこんなに貧乏な暮らしをしていたのだろう？」

哀れな棺はやがて喪服にシルクハットをかぶった四人の男によって運び出された。その夜、彼女は枕がびしょぬれになるほど泣いた。』

そのときユリアーネのまえに後見人として名乗り出たのがヘックリフ医師であった。ユリアーネの目に写った彼は陰湿で残忍な中年男であった。彼はユリアーネを一人住まいの自分の家に住まわせて診察時間に手助けをしてもらおうと考え、そのことを彼女に申し出る。しかし彼女は「自分は誰にも縛られたくない」と言って彼の申し出を一端は断るが、周囲の人々は冷酷で、彼女が考えているほど甘くはない。ユリアーネは貧乏という宿命を背負った自分を見つめざるをえなかった。そこで自分の意志に反してやむなくヘックリフに引き取られることになり、そこから物語が展開されていく。

第四節 『生の半ば』および『ダニエラ』における内面的限界状況

『生の半ば』は諦めによって終わりを遂げた恋愛小説であるが、昔の友だちの日記帳、手紙、対話、報告、短編小説、反省などを組合わせたもので、ナチ専制政治下であって、ニーナという女流作家が19才から19年間医師シュタインから愛し続けられた生活を通して、そこに繰り広げられるさまざまな人生模様を描いた作品である。

ニーナは裕福な医師シュタインから愛され何度も求婚されるが、何事にも妥協というものを許せない強烈な性格の持ち主である彼女は、その愛にも妥協できず、自分の目の前にある安定した生活を受け入れることができない。

一方『ダニエラ』の主人公ダニエラはかなり高い地位の役人の娘であり、大都会で教師をしていた。しかし若いダニエラはその恵まれた生活と婚約者を捨てて、沼沢地の極度に貧困な村の教師となって行く。泥炭掘を唯一の生業としている地帯で、村民は経済的にも道徳的にもどん底の生活をしている。彼女はまず生徒のしらみ駆除から始めなければならない。安い火酒と荒淫だけを楽しみにして生きている村民は、若い教師のそういう努力を嘲笑う。

ダニエラは貧乏とか悲惨とかいうことは、書物の中で知っているだけであったが、強い意志力と行動力をもって、泥沼に秩序を作っていく。しらみはいなくなり、肺病の子供は入院し、ダニエラが実家や友人から集めた古着で生徒たちはひととおりの身なりをするようになった。しかし村民の邪淫と不倫とは、小学校の子供たちをも早くから性的に救い難く、その人格を曲がったものになっている。純潔なダニエラはそれには耐え難い絶望を感じる。

校長も二十年まえには理想をもってこの地にやって来たが、乱酒によって廃人のようになって死んでいく。聖者とも馬鹿者とも言われる女教師もやがて破滅するばかりだ。おまえも同じ運命をたどるほかはない、と村民に言われ、ダニエラも泥沼との戦いに疲れはて、唯一の頼り

とする牧師の子を宿して村を去る。

以上、両小説の主人公ニーナもダニエラも外面的、つまり生活的にはなんらそのような環境に飛び込んでゆかねばならない事情を持たないのに、まわりの人々の反対を押しきって、自ら選んで精神的な、内的な束縛の中に自分を押し込めてしまう。そして著者はその中で彼女らがどのように自らを律して行動していくかを物語ろうとしている。

結局リンザーは、環境にたいする個人自身の内的に問題のある場合と、宿命的、外的に問題のある場面を提供して、いずれにしても「個人の生活態度」に一番大切なものが存在していることを言おうとしているのではないだろうか。

結 論

はじめにも述べたように、リンザーの作品にはキリスト教的救済が作品の前面に押し出されていない。つまりキリスト教的枠の中ではなく、純粹に人間的な立場から、現代人の救いということが作品の根底に流れている。ということは、他のより宗教的な作家——と簡単に呼んでよければ——において見られる救済の要因が人間個人の内から神によって引き出される点に力点をおいているのに対し、リンザーの場合は、人間の魂そのものの精進が救いを貸すもっとも重要な鍵である、と言っているように解される。

カトリック信者である彼女がこのような作品を書くに至ったのは、やはり彼女の獄中体験が大きな要因になっている。1981年の来日の折の講演の中で(注8)彼女はこの点に関して次のように述べている。

『獄中の日々に私は、神に釈放を祈ったり慰めを求めたり、子供たちをお守りくださいと祈ったり、というようなことはなにひとつしませんでした。神は私の意識のなかにはありませんでした。神もなく形而上の力や助けに頼ることなしに生きることができなければならぬ、という経験を私はしたのです。私は自分自身にすべてを賭けました。私は一人で生きてゆけるだけの強さを持っていました。人は荒野の中でも生きていけます。私は、私と数百万の人々をこのような運命にあわせたナチスに対する怒りでいっぱいでした。私は完全なマルクス主義者になり、神から何物をも期待せず、人間にすべてを期待して、政治、社会、意識の変革にすべてを賭けました。』

以上のような体験をしてきたリンザーが彼女の作品のなかでもっとも力点をおくところは人間の性格の強さである。この性格の強さを小説作方上合理化する意図から、リンザーは小説の主人公を種々の枠に収めたのである。そして強い性格は自己を救済し、弱い性格は自己を破滅することを訓えたのであろう。(本学助教授＝独語担当)

注

- (注1) W. Grenzmann : “Dichtung und Wahrheit” Athenäum-Verlag, Bonn 1950
(注2) ルイーゼ・リンザー『或る女の話』稲木勝彦編 三修社
(注3) ルイーゼ・リンザー来日記念講演 於朝日新聞社1981年6月
(注4) 彼女はこの日本滞在中に70歳の誕生日を迎えた。
(注5) 第二次戦時下のナチスの秘密国家警察 Geheime Staatspolizei
(注6) Gespräch über Lebensfragen 1966, Gespräch von Mensch zu Mensch 1967
(注7) 新潮世界文学 48 参照
(注8) 注3参照

参考文献

- Luise Rinser : “Hochebene” Benzinger Verlag/Einsiedeln, Zürich, Köln, 1953
Luise Rinser : “Mitte des Lebens” S. Fischer Verlag 1952
Luise Rinser : “Daniela” S. Fischer Verlag 1953
Luise Rinser : “Abenteuer der Tugend” S. Fischer Verlag 1957
Luise Rinser : “Gefängnistagebuch” Zinnen Verlag Kurt Desch/München, 1946
Wolfgang Kayser : “Kleines literarisches Lexikon I u. II” A. Francke AG Verlag/Bern 1961
Karl August Horst : “Die deutsche Literatur der Gegenwart” Nymphenburger Verlagshandlung/
München 1957
Wilhelm Granzmann : “Dichtung und Wahrheit” Athenäum Verlag/Bonn 1950
Werner Zimmermann : “Deutsche Prosadichtungen der Gegenwart I u. II” Pädagogischer Verlag
Schwann/Düsseldorf 1957
Inge Meidinger-Geise : “Welterlebnis in Deutscher Gegenwartsdichtung I u. II” Glock und Lutz/
Nürnberg
フリッツ・マルティニーニ著：“ドイツ文学史 原初から現代まで” 三修社 1980